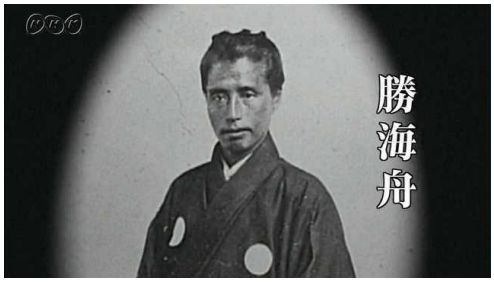
# 「赤松小三郎と勝海舟」講演会に参加して

上原 昇（2 組）

１２月１２日（日）の午後、関東同窓会の赤松小三郎研究会が主催する講演会が日比谷図書文化館（日比谷公園内）で行われました。
演題は『赤松小三郎と勝海舟』、演者は著名な歴史研究家の安藤優一郎氏です。
当日はコロナ禍が収まったなか、久しぶりに１００名を超える人が参集。内訳は４割が上田高校同窓生、６割は一般の人とのことで、同研究会が世間での知名度を上げていることが分かります。
６５期の参加は原田義則君（３組）、櫻田喜貢穂君（７組）と筆者の３人となりました。
安藤氏が赤松を知ったのが２年前とのことで、赤松関連での新事実を聞くことは出来ませんでしたが、幕末、維新の時代における赤松の評価を聞くことが出来ました。
赤松は、安政２年（1855）長崎海軍伝習所で海舟の従者として、軍事知識や語学能力の向上に努めます。万延元年（1860）、海舟は咸臨丸を指揮して米国に渡りますが、小三郎は乗船できず、悔しい思いを抱きます。
その時の悔しい思いが “春風や東に霞む舟ふたつ”の句に表わされています。
小三郎が咸臨丸の乗組員として米国に渡っていたら、その後の人生は変わっていたかもしれません。身分が低かった小三郎ですが、上田藩主の松平忠固が老中で留まっていたら乗船できたかもと思います。
その時、咸臨丸に乗っていた一人に福沢諭吉（1835～1901）がいました。
小三郎と諭吉のその後を見ると、その違いに驚きます。
３７歳の短い時を駆け抜けた小三郎の生涯に心を寄せた講演会でした。
講演後の質疑応答も、この会の特徴で熱いものがあります。
最後に発言したのは、海舟の玄孫にあたる高山みな子さん（フリーランスライター）で、参加者はびっくりしました。

赤松小三郎




（21 年 12 月 12 日記）　　以上